



ASIA-JAPAN RESEARCH CENTER
KOKUSHIKAN UNIVERSITY

CONTENTS

三菱重工業(株) 太田 博 巻 頭 言
第3回、第4回勉強会 活動レポート
イベントスケジュール イ ン フ オ

巻 頭 言

中国の挑戦と日本のアジア戦略



アジア・日本研究センター運営委員
三菱重工業(株)社長室顧問
太田 博
(元・サウディアラビア、タイ大使)

21世紀を迎え、アジアおよび世界は中国の2つの挑戦を受けている。

第1は軍事を含む広い意味での政治面に

おける挑戦である。中国は現在の国際秩序をそのまま受け入れることをよしとしない現状変更勢力である。まず台湾がある。中国にとって台湾の併合は悲願であり、その実現のためには武力行使も辞さないと言っている。しかし中国が現状に甘んじないのは台湾問題に限らない。中国は米国が唯一の超大国として覇権を握っている現在の国

際秩序そのものに満足していないのである。すなわち米国の覇権体制に対する挑戦である。その為には何よりも核戦力を充実し、米国に対する有効な抑止力を得ようとするだろう。中国が米国のミサイル防衛システムの推進にあれほど強く反対しているのは、米国のミサイル防衛システムが、中国の核抑止力を無力化しかねないからである。

中国が米国に対抗するような政治的軍事的超大国になろうとするのであれば、日本は単独でこれに対処するすべはない。日本の選択肢は日米同盟の強化、維持以外に無い。日米同盟がしっかりしていれば、たとえ仮に将来中国が日本に軍事的圧力を加えるようなことがあったとしても、日本はひるむ必要はなく、また日米同盟の堅持は東アジアの他の諸国、特にアセアンの安定維持に貢献することとなる。

中国の第2の挑戦は経済面におけるものである。近年中国の経済発展はめざましく、この弾みは当分続きそうである。中国政府が述べているように、もしこれから10年中国経済が年7%で成長するとすれば、10年後に中国経済の規模は現在の2倍になる。日本企業の対中投資による日本経済の空洞化傾向の進展、安くて良質な中国製品の大量輸入による日本経済のデフレの加速化な

ど、日本経済に対する影響は少なくない。

アセアン経済も大きな影響を受けるであろう。アセアンにとり中国は競争者として登場する。一つは日本や他の先進国の投資であり、中国に対する投資の増大はアセアンに対する投資の減少に繋がる恐れがある。今一つは中国の輸出で、安くて良質な中国製品がアセアン内および外国市場でアセアン商品と競合する。

ただこの経済面での中国の挑戦は、政治軍事面での挑戦と基本的性格を異にする。それは中国が現在の世界の経済、貿易システムそのものに挑戦しようとしているのではなく、世界の経済、貿易システムの一員として、そのシステムのルールに従って行動しようとしていることである。中国のWTO加盟はまさにそのことを象徴している。そうであるとすれば、中国の挑戦には日本としても十分対応が可能であり、また中国が世界の経済、貿易システムの一プレイヤーとして、他国との経済的相互依存関係を深めるのは好ましいことである。日本は自分自身の対応に遺憾なきを期すると共に、アジアにおける日本の重要なパートナーであるアセアンが中国の挑戦に圧倒されることの無いよう、アセアン支援を強化すべきである。

第3回勉強会 “都市空間の危機と宗教”

2001年11月30日、アジア日本研究センター第3回の勉強会を開催した。今回の勉強会は、国際宗教学会常務理事であり、日本をはじめとする諸外国の宗教に関する多数の著書、学術論文を発表されている、当センター教授 荒木美智雄氏より“都市空間の危機と宗教”と題し、古来より都市の持つ宗教的意味を整理し、現在の都市を巡る問題点を宗教的見地から論じられた。

冒頭、当センター長三浦信行よりの挨拶を受けて、まず、なぜ、今宗教なのかという問いかけがなされた。世界の宗教的指導者や宗教学者が集まる国際宗教学会にふれ、こういった会合は従来人類の歴史上なかったことであり、宗教界の内外から宗教の役割についての関心が高まっていることが示された。

続いて現代の都市空間の問題を中心に講演が進められた。前段として古代都市国家が持つ宗教的意味について、古代都市は「祭祀空間」としての宗教的空間構造を有しており、宇宙や自然に対する宗教的顧慮が随所になされ、宗教による秩序が存在していたことが強調された。

しかし、このような都市の有する意味と役割は、産業革命以降、西欧諸国が世界各地に植民地を形成し、そこに西洋の都市を模倣した都市ができるにつれ薄れていく。この宗教的基礎付けを欠く世俗的な模倣都市群には、近代都市文明と共に流入した経済格差をはじめとする様々な不平等に起因する不法占拠地区の形成、あるいは多民族、多文化、多宗教、多言語といった不安定な共通項が多く見られる。

さらに、現在、先進国の産業社会で都市化の進展が減速している一方、多くの発展途上国で近代化・都市化が進んでおり、上記の都市問題が一層拡大することが推測される。そして21世紀の終わりまでに、都市と都市が連続したエキユメノポリスと呼ばれる究極の都市化状態が地球上をくもの巣のように覆うようになり、予想される人口問題、経済格差問題、環境問題、食料問題、更に難民や労働者の移住の問題など、深刻な人類の生存の危機が強調された。

この様な都市問題の最大の焦点として、都市の不法占拠地区が挙げられるが、現在、民衆宗教と呼ばれる新宗教は、その多くがこの不法占拠地区から派生している。不法占拠地区の住民の多くは、都市郊

外からの流入人口であり、特にアジアの都市ではこういった地区で様々な異文化同士がぶつかりあう。その中から、新しい意味を見い出すための宗教運動が発生し、それは、都市空間を新しく意味付ける運動にもつながっている。

現在、現代社会に突き付けられた様々な混乱要素を神話論的に原初のカオスに見立てて、新しいコスモス（秩序）を創ろうとする、新しいタイプの宗教運動が都市から生まれている。グローバリゼーション、ボーダーレス化とはいわれるものの日本人が身近かに感じていない問題や危機的な文化混融は第三世界では日常的に見られ、その中から新たな都市秩序の構築が試みられているとまとめていただいた。

第4回勉強会 “イスラムとテロリズム”

続いて2001年12月4日、第4回の勉強会を、トルコ民族を中心とするイスラム世界史を研究され多数の著書、学術論文を発表されている、当センター教授 小山 浩一郎 氏をお招きして開催した。今回の勉強会は、昨年9月11日に起きた米国同時多発テロを受けたかたちで「イスラムとテロリズム」というテーマで、テロ事件の根底に流れるイスラム教の概念について講演が行われた。

まず、イスラム教の特徴として、その根本聖典であるコーランに明記されている通り「聖戦（ジハード）と殉教」の観念、つまり異教徒と戦って戦死したものは殉教であるとの考え方が挙げられる。これにより異教徒に対する聖戦、また殉教が神聖視され、これが今回のテロ事件の根本動機になっていることが指摘された。

テロリズムは、個人の活動ではなく組織として活動するための母胎が必要である。イスラムの歴史では、12世紀初頭のイスマイル派暗殺者教団の誕生がテロリズムの萌芽としてとらえられよう。このイスマイル派は、イスラム教の中でシーア派と呼ばれる少数派で、勢力拡大の手段として暗殺を活用した集団であり、これ以後、イスラム世界にテロリスト集団は多数発生するが、現在の暗殺・テロ組織は、このイスマイル派暗殺教団の系譜に位置付けられる。

またイスラムのテロ活動は、国家が弱体化した分裂の時代に活発化し、強力な権力の出現によって消滅する特質があり、現在のイスラム世界は統一した指導者（カリフ）が不在であり、テロリスト集団が生まれる基盤は当分存続するであろうことが指摘された。例えば、現在でもイスラム世界の中でイラク・シリア・イランのような独裁政権が存在する諸国がテロに対して安全であり、エジプトなど比較的民主的な体制を持つ国がテロリストの温床となりや

すい傾向も示されている。

現代のイスラム世界でのテロリズムは1979年のイランのイスラム革命、また同年のソ連のアフガニスタン侵攻によって聖戦の対象が生まれたことに端を発する。このテロ行為は、当初は政府指導者など一部の要人の暗殺であり、反体制運動として理解もできるが、だんだん無差別に全く関係のない人間に対してのテロが多発するようになった。また一方、湾岸戦争時の米軍のサウジアラビア駐留が反米感情を刺激し、米国の軍人や、軍事施設、あるいはアメリカ大使館などを対象としたテロが繰り返し行われるようになる。

例えば、テロ組織アル・カイダの指導者であるオサマ・ビンラディンがアラブ系のテロリスト集団の中で頭角を現したのは、この反米テロ事件の中からであった。しかし、現在のビンラディンに対する評価は、アメリカを中心としたグローバリゼーションに対する抵抗の戦士のようなかたちで捉えられていることが多くみられ、これはかなり過剰、過大な評価であろうことが指摘された。

最後に、イスラム系のテロリスト集団に対しては、モンゴル帝国がイスラム世界を支配した際に行った、テロ組織など不安定要素への徹底した弾圧と撲滅にならない、全ての拠点を徹底的につぶしていくことが目下の急であることが述べられた。これによりモンゴルはバックス・モンゴリカを実現したのである。

また、テロリストが逮捕されて裁判になった場合に多いケースとして、司法の非宗教化が完全でない国では宗教裁判、あるいは教理問答になってしまう場合が多く、宗教的なテロリスト集団に対処する際は徹底的に非宗教的な立場に立って対処すべきで、信仰に関する議論に巻き込まれてはならないことも併せて強調された。

I n f o r m a t i o n

イベントスケジュール

工学部建築学科/アジア・日本研究センター共催シンポジウム 開催
“亜細亜都市建築岐路”

2002年最初のイベントとして、1月23日 工学部と共催のシンポジウムを下記の要領で開催します。皆様方多数のご参加をお待ちしております。なおご出席及び、詳細につきましては下記 事務室までお問い合わせ下さいませようお願いします。

日 時 平成14年1月23日(水曜日)午後3時00分～午後6時00分
場 所 国士舘大学 世田谷キャンパス6号館 6503号室 世田谷区若林4-31-10
特別講演 “亜細亜都市建築岐路”
ミルトン・タン [シンガポール国立大学 デザイン・環境学科主任]

パネルディスカッション “亜細亜都市建築岐路”
パネラー ミルトン・タン [シンガポール国立大学デザイン・環境学科主任]
足羽 與志子 [一橋大学大学院社会学研究科教授]
梶原 景昭 [国士舘大学アジア・日本研究センター教授]
コーディネーター
国広 ジョージ [国士舘大学工学部助教授]

第5回勉強会 開催

本年8月よりスタートしたセンター公開勉強会の第5回として、当センター教授 濱田 英作(東西交渉史)を講師として、シルクロードの歴史と現状を中心(予定)とした勉強会を下記の要領で開催いたします。

日時・場所 2月21日(木)午後2時00分～4時00分
国士舘大学 世田谷キャンパス 10号館 5階会議室
講師・演題 濱田 英作 当センター教授

第5回シンポジウム 開催

第5回目のシンポジウムは、21世紀アジア学部開設記念として、『21世紀アジアの大学』と題して、2部形式で開催いたします。

詳細が決まり次第ご連絡いたします。皆様方多数のご参加をお待ちしております。

日 時 3月8日(金曜日)午後1時00分～午後5時40分
場 所 国士舘大学 世田谷キャンパス 中央図書館 B1F 多目的ホール
講 演 “21世紀アジアの大学” (講師予定)
アシス・ナンディ [インド デリー社会開発研究所 所長]
景 [中国社会科学院社会学研究所 所長]
唐 志强 [シンガポール国立大学社会学科 教授]
羅 紅光 [中国社会科学院社会学研究所]

“21世紀アジアにおける大学と社会” (講師予定)
ハンス・ゲオルグ・セフナー [ドイツ コンスタンツ大学 教授]
ヌール・ヤルマン [ハーヴァード大学人類学科 教授]
青木 保 [政策研究大学院大学 教授]
黄 平 [中国社会科学院社会学研究所 副所長]

◆ 出版物のご案内 — アジア・日本研究センター 紀要 —

アジア・日本研究センターが2000年10月に設立されてから開催した、第1回から第5回のシンポジウム・パネルディスカッションの内容を編集・収録した、“アジア・日本研究センター 紀要”を2002年3月予定。

◆ アジア・日本研究センター 運営委員会開催

2001年11月30日、当センター運営委員会を開催した。冒頭、委員長の三浦センター長よりのあいさつの後、新任委員の岡田 国際センター長の紹介が行われた。ここでは、センターが設立されてからの活動状況の報告、及び“21世紀アジア学部”の開設にあわせたかたちでの平成14年度の具体的活動方針(シンポジウム・研究会の開催、調査研究体制)について意見交換がされた。

◆ 事業活動・出版物等のご報告